

みんなで作る 造形遊び

造形活動は、一人ひとりが自分の表現したいもの、作りたいものを見つけ、心のなかで育てていくことから始まります。「クリスマス」という言葉から、子どもたちのさまざまな想像力を働かせます。それが大きなエネルギーとなって、切ったり、はったり、描いたりする行為を生み、作品となります。子どもたちの作品が集合してクリスマスの「インディアン」になりました。みんなでひとつの作品を作る造形遊びです。



「インディアン」(クリスマス)

クリスマスは、キリスト教徒にとって宗教的な祝祭日のひとつで、家族と教会へ行ってお祈りをし1日を過ごします。日本では、子どもを中心とした家族の季節行事として定着し、プレゼントを交換したり、友だちとパーティーを開いたりして過ごす、1年でもっとも心おどる日になっています。

国は違っても子どもたちは、クリスマスツリーを飾ったり、サンタクロースからのプレゼントを心待ちにして、ベッドに入ります。

毎年12月になると、世界各国から巨大クリスマスツリーの話が伝えられます。クリスマスを象徴するものだからです。星の光の再現から生まれたといわれる“イルミネーション”は、クリスマスが近づくにつれて街のあちこちでもりはじめ、幻想的な世界を作り出しています。

「インディアン」は、子どもたち一人ひとりが作ったクリスマスにちなんだ絵を、骨組みにはりつけて作ります。絵は、うすい和紙の台紙のうえに、うすい色紙や色セロハンなどを使ってコラージュして作ります。

みんなで協力して、クリスマスツリーの「インディアン」を作り上げます。一人ひとりが作ったものは、小さな絵かもしれませんが、たくさんの作品が集まると互いにエネルギーを増幅しあって、力強い作品になります。

「インディアン」は、光源を仕込んだ骨組みを作っておけば、さまざまな場面に応用ができます。例えば、季節行事の「桃の節句」に、おひな様や春らしい飾り付けをすれば、ぼんぼりに変身させることができます。

骨組みの形も、テント型ではなく四角柱の行灯型にすれば、作品展示用としても使用できます。また、児童館の入り口に飾れば、子どもたちみんなを迎える門にもなります。

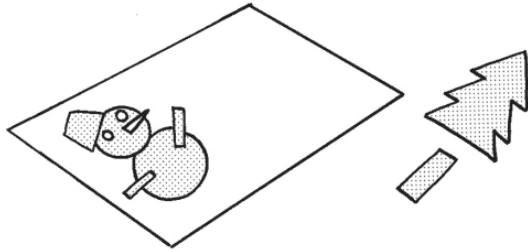
大きな作品なので、一人ひとりで作るのではなく、み

んなで共同制作するほうが、より楽しいプログラムになります。「インディアン」に飾られた一つひとつ作品には、作った人一人ひとりの個性があります。たくさんの個性が集まって、「インディアン」というひとつの作品になるのです。

「インディアン」は、さまざまなかたちで応用できるプログラムです。“インテリア”の要素ももっているので、いつもの空間をかんたんに変貌させることもできます。環境を設定する“ツール”としても活用できます。

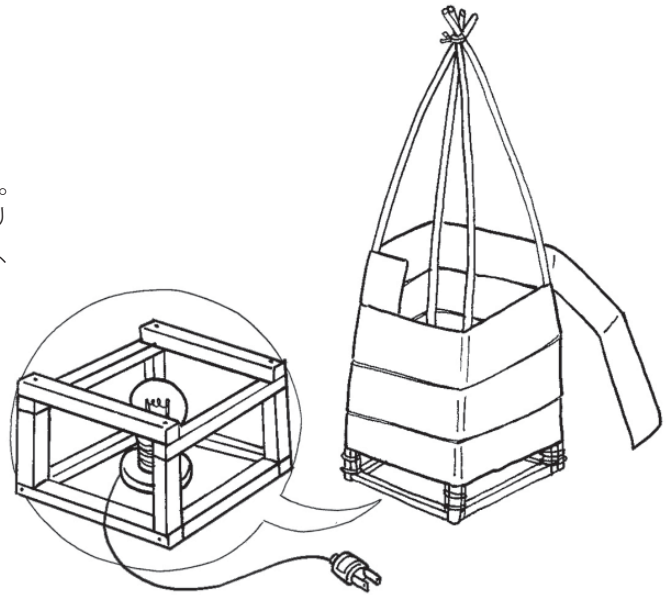
□ 「インディアン」の作り方□

①うすい和紙に“クリスマス”をテーマにした飾りつけをします。
うすい色紙や色セロハンなどを使って、コーラージュします。



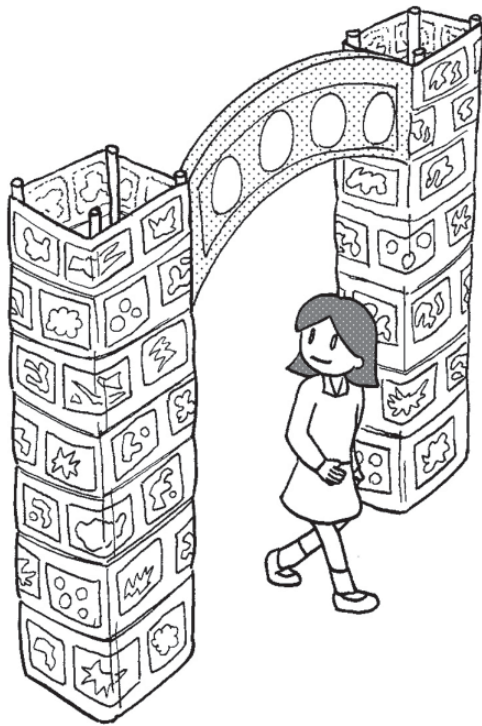
②できあがったら、木枠の骨組みにはっていきます。
はるときには、絵を裏返して、のりで木枠に取り付けます。
展示したときには、文字などは逆さまに見えることとなりますが、「インディアン」の光が壁などに落とす影は、正像になります。

光源は、点光源の白熱電球が良いのですが、発熱するので紙などを燃やしてしまう危険があります。電球に紙がふれないように、十分なすき間をあけるように注意してください。
最近は、消費電力や発熱が少ないLEDライトが使われるようになりました。紙などの燃えやすい素材と組み合わせて、光源として使われるようになってきています。さまざまな光源を使って、光の効果を試してみてください。



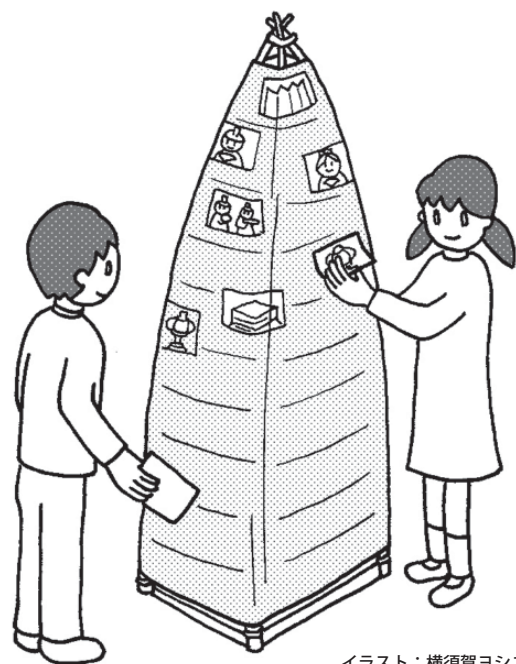
- 「インディアン」作りで使う道具□
はさみ／のり／骨組み：照明器具を仕込んだ間伐材や小割を使った四角すい（90×90cm×高さ2～3m） ※ライトテーブルがあればなお良い
- 「インディアン」の材料□
①うすい和紙（習字用半紙でも可、170×250mm）
②色セロハン
③うすい色紙（カラペ）

□ 「インディアン」の応用□



四角柱のインディアンを2つ並べて、ゲート（門）として利用することもできます。催しに関連する絵を子どもたちに作ってもらえば、子どもたちみんなの作品であると同時に、催しに彩りをそえるインテリアにもなります。

四角錐のインディアンは、まさに“インディアン”のテントの形をまねした“アンドン”です。子どもたちがはりつける絵が増えていくにつれて、にぎやかになり、楽しいインディアンができあがります。



イラスト：横須賀ヨシユキ